



木元進一郎監修 茂木一之・黒田兼一編著

『人間らしく働く
—ディーセント・ワークへの扉—』
鬼丸 朋子

ワーキング・プア、派遣切り、内定切り、過労死・過労自殺、セクハラ・パワハラ、リストラ、賃下げ等々、人びとの耳目を集めるニュースの数々に通底するのは、世界屈指の経済的豊かさを享受しているはずの日本で「人間らしく働く」場が急速に痩せ細っている現実である。本書は、いわゆる新自由主義的構造改革・規制緩和の批判的検討を土台としながら、人間らしい「働き方」「働かせ方」の実現によって今後の日本経済の持続的発展を展望しようとする意欲作である。

「第1部 市場神話は私たちに何をもたらしたのか」は、全体の総論として「労働という社会的機能を思考軸に」膨大な先学の理論的成果を分析し、自由競争・グローバリズム推進至上主義という「神話」が「胎内に不合理性を孕み、諸個人の個別化（孤立化）をもたらし、結局は自らの母体をも蚕食してしまう宿命にある（15頁）」ことを明らかにしている。この内在的批判

を受けて、「第2部 これからの人事労務に必要なこと」では、「人間らしく働く」場という観点から、現在日本の労務管理に関する具体的な議論が展開される。ここで取り上げられる「正社員の人事・賃金（成果主義）」、「非正規雇用問題」、「労働時間制度（ホワイトカラー・エグゼンプション）」、「若年労働者のキャリア形成問題」、「労使関係」は、いずれも近年注目されているトピックスであり、現状の的確な把握・分析に資するものである。さらに、「第3部 サステイナブルな働き方—スウェーデンの場合—」で、「市場原理主義と一線を画しながらすべての人々がサステイナブル（持続可能）な働き方を追求している（201頁）」実例を通じて、日本の「働き方」「働かせ方」を相対化し、今後の社会発展の一つの方向性を示唆している。

本書は、日本におけるディーセント・ワークの実現を、労働者のみならず企業にとっても積極的意義を持つものと捉えると同時に、自国の維持・発展のための土台としても位置づけている。その上で、豊富な理論・事例を手際よくまとめあげ、いかにして「人間らしく働く」場を再構築すべきかを論じている。本書は、有用な情報・議論がバランスよく配置されているだけではない。読み進めるうちに、読者に、個別のテーマを貫く現在日本の雇用・労働問題の深刻さと根本的且つ包括的な対応の緊急性を、改めて認識させる良書である。この領域に関心のある方に一読を薦めたい。

（2008年11月・泉文堂・2800円）

（おにまる ともこ・理事・桜美林大学准教授）